
とある魔術と科学の交わり

蒼い目の男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と科学の交わり

【ZPDF】

Z0062Z

【作者名】

蒼い日の男

【あらすじ】

当麻とインデックスが御坂や頬もしき仲間達と共に学園都市を再び救う外伝

五人と死神（前書き）

2ヶ月掛けましたが、お見苦しいと思います。ただ、誹謗中傷等を一切受け付けません。

五人と死神

上条 side

私、上条当麻は只今、経済的な意味で大変な危機を迎えております。何故か？

理由は簡単、私の居候が大変食いしん坊であるからでし

「当麻！当麻！お腹空いたからまたハンバーグを食べたいな ねえ！ねえ！良いでしょ？」

「お前、昨日食ったばっかじゃないか」

俺は呆れ顔とも怒っているのもつかない顔でインデックスを見る。

「当麻、いつまでも過去を振り返ってたら、そんな事じゃダメ何だよー過去は過去、未来は前にあるんだよ。昨日の事はもう忘れたから、だから、今日はファミレスに連れて行つてよねー。」

隣でベッドの上ではしゃいで、俺のベッドをギシギシさせてている白い修道服を着ていて、白い髪のこの女の子が、一応、シスターのインデックスである。一見すればただの元気で食いしん坊なシスターなだけなんだがな、

しかし、

「こつこつこつとした秘密がある。

何を隠そう、信じられない事に彼女の頭の中には十万三千冊の魔導書が入っている。

まあ、正確に言えば読んだ魔導書を記憶していると言つた方が正しいかもな。

だから、辛い人生を送つていた。

特に、一年毎に記憶を消去しなければ、彼女は生きられないと言つてゐる。と云つて、イギリス清教が、彼女が自分達から離れないように枷を付けた。

と言つ事が後々、分かつたらしい。実は、俺の記憶が少し前から無くなつてゐるのだった。

でも、今は、笑顔を絶やさなくなつた。

ある意味、俺のこの能力のおかげかもしない。

「幻想殺し（イマジンブレイカー）」

異能の力、魔術関係無く「消す」事が出来る能力。それが、俺の能カカラ力。

だけど、これまでだが、これからも一部の魔術師がこの中の様々な魔導書を利用しようと狙つてくるだろ。

その度に俺は闘つつもりだ。

考えてみるとこの力はこの為のかもしない、多分、

・・

まあ、最近は何も無いから出来れば、このまま平穀が続いてくれる事を願

ガガガガガガ

?-ゾクッ

と後ろから殺氣を感じ… ゆっくり首をギチギチと振り返ると

牙を剥き出しにしたインデックスが歯をギラッと輝かしていた。

「と~~~~~ま~~~さつきからこの私を無視するなんていい度胸
してゐね…」

怒りに満ちた声でインデックスがジリジリと近づいて来た。

「ま、待て！分かった！分かったから！それ止めてくれ！毎度、毎度、結構痛いんだぞ！それ！

分かったよ！ファミレスでも何でも食わしてやるから！
だから、止めてくれ！頼む！」

上条は必死にアレを食らいたくないあまり、後ろに下がりながら懇
願していた。

だが、ここは狭い部屋なのですが、壁にバンッとぶつかった。
しかし、彼女は容赦なかった。

「これは神の御意志なんです。」

インテックスはいつと並んだ。

「どんな神だよー。」

上条は本能的に心の中でシシ ロリを入れるも次の瞬間
ガブッ！

と、インテックスが刃麻の頭か顔に歯が肉に突き刺さる音が部屋に
響くと同時に、

「つかやあああー不幸だ〜〜！」

彼の叫び声は今日も学園都市中に、かなり響いたのであった。

お約束を破らない彼であった。

御坂 side

とある路地裏

表通りも中々暗かったが、よりもと暗い路地裏に影が通った。

「…はあーはあー畜生ー何でこんな所にジャッジメントがいやがる
んだ！」

「…まあ、ここまで来りやたすがここまで追いつては来れ

全身を黒で包んだ標準体型の男はホッと息をついた。

その時ー

「逃げられたと思ってー？「黒い男」さん？」

突然、女の声が響いた。

男はハツと、路地裏に向かつて影が伸びていたのに気づいた。

男は影の根元に顔をサッと動かすとそこに茶髪のツインテールの女子が立っていた。

「？！つなー」

呼ばれた男は驚愕のあまり立ち上がっていた。

「ジャッジメントですのーあなたを器物損壊、傷害罪であなたを逮捕致します。」

彼女は右腕のジャッジメントの腕章を良く見えるように引つ張りながら、言い切った。

「てめえ 一体どいつもこ��でー。」

男は女子に構えながら問つた。

すると、

ツインテールの女子は呆れた顔をしながら答えた。

「そんな事を今聞くのでして？まあ、教えてほしいのでしたら、教

えて差し上げてもよろしくですわよ。

た・だ・し

面会室でと面づ事になりますが、どういたしますか?」

茶髪の女子は明らかに捕縛する意志を出していた。

「……くつ」

男は押し黙った。

沈黙が続いた。

だが、

「うおらあああああああ！」

最初に動いたのは男の方だつた。

男は叫びながら指と指を交互に重ねてアスファルトに叩きつけた。

アスファルトが地獄の針山のように先が尖つて、まるで波のようになってしまった。

ツインテールの女子は全く動じない。

次の瞬間、

ドゴオオオオオン！！！

下から煙が巻き上がり、視界が埃とつもり積もつた塵で覆われる。

「ハアハア…」

男の肩が上下に動いている。

「やつ…やつたのか?…へつ、何でえ大した事ねえじゃねかー」

男はジヤッジメントを倒せたと思い、少しホッとすると
だが

ヒュン!足に何か当たった感触

クルン!休む間もなく宙を回る空氣音が続いて

ドカッ鳩尾に強烈な衝撃、

男はえつ?と叫ぶ間もなく

「? ! がはつ」

サクツ! サクツ!

何かが自分に刺さる音がした。

いや、自分の体、正確に言えば、服を囲むように、十?ぐらいの針
がアスファルトに固定されていた。

「なつ? ! いつの間に? !」

「あなた?少し、ジヤッジメントを薦めすぎていません?」

男がホツとした隙に女子は下段の足払いをし、重心が傾ぐのを利用しつつうつ伏せにして、とどめをお見舞いしてから

針で固定したのだ。

そして、いつの間にか男の後ろで腕を組み、

前髪を後ろの方へ手でサッと流す。

「さて、まずは一人。…」

女子はおもむろに胸の内ポケットから小型の端末機を取りだし、小型端末機の機械音と鳴。

ピッポツパッピッ

「はい。こちら初春です。白井さん、もうすぐこちらにアンチスキルが着きます。」

「そう。なら、初春、残りの犯人の居場所をお願いします。」

白井と呼ばれる女子は次の指示をよこすように言った。

「はい、えと、そこから100㍍ぐらいの所をまっすぐ、そしたら、

5階建てのビルがあります。

それを越えたら、

まっすぐに、一つ目の角を右に、そこで彼らが会えるはずです。

気を付けて下さいね。白井さん。」

初春と呼ばれる女子は指示を言い切つてから、心配しながら言った。

「了解しましたわ。犯人達が移動開始をしたら、すぐに連絡をいいですわね？」

白井は最悪のケースを考え、初春に指示を出しながら、ポケットに携帯端末を押し込み。

そして、また移動を開始した。

彼女は能力者である。

「空間移動テレポート」

よく知られている能力であり、学園都市で学生が最も目覚めやすい能力の一つである。

一しばらくして、黒子は犯人達がいる袋小路の入り口に来た黒子は落ち着きながら、様子を伺っていた。

「いいですわね。・・・

スー、ハー、・・・

ダツ！と駆け出す黒子

「ジャッジメントですわ！！投降しなさ……い？」

黒子は思わずポカーンとしてしまった。

理由は簡単だ。

待ち構えているはずの犯人達が冷たいアスファルトに寝そべっているからである。

そして、そこに立っていた人物に黒子は一重にショックを受けた。その人物とは——

「お、・・お姉様？！」

茶髪のショート、下校途中だったのでありの制服の女子がそこに居た。

ふと、その女子が後ろに振り向いた。

「？・・ああ、黒子。」

——ジャッジメント第177支部

「お姉様！！！あれほど危険な事に首を突っ込まないでとー言いましたのに、それに、あのような輩を捕まえるのは私達、ジャッジメント の仕事ですよ？」

「はいはい、分かったわよ。」

茶髪のショートヘア、清楚な茶色の制服、優雅で、凛とした風貌のこの女子の名は――

御坂美琴

――学園都市で七人しかいない――eve15の中で第3位の数少ない者である。

通称「超電磁砲 レールガン」

簡単に言えば、電気を纏わせ、打ち出す事をレールガンと言つ。

「黒子、所で、あいつら一体、何なの？」

御坂は黒子に問うた。

黒子は思わず呆れた顔になつて口を大きく開けていた。

「なつー？お姉様、まさか、そんな事も知らないであんな危険な奴らを叩きのめしましたのー？」

「うん。まあ、で、それで、あいつらは何なの？」

御坂は黒子の質問を軽くスルーして、少し怪訝そうな顔で黒子に再び質問した。

「はあ……まあ、どうせお姉様には言つつもつでしたし、いいでしょ

と黒子はそこで一旦、切つてから

「 黒い男 …」

黒子は少し険しい顔になりながら、ぼそりと言った。

「 つ？…」

御坂は黒子の方にサッと振り向いた。

「 そう、ここ、最近、学園都市でテロ行為を行つてゐる過激勢力。構成員は能力者のみで形成されてゐる。そして、メンバーは全員、全身を黒い服装で纏つてゐる。

と、ここまで分かつてはいるのですけど、

彼らの目的、規模、アジト等々、詳しい事はまだ分かつておりませんの。」

「 …聞いている。それで、あいつら、L e v e l 2以下、無能力者を襲つてはいるって。あいつら…何様のつもりなのかしら…」

御坂は椅子の肘おきを強く握つてゐた。

沈黙が流れた。 –

「 はあ…止める。ヒ、言つても聞こいつとしない顔ですわね。」

黒子は思わず溜め息をつく。

「 今回は特別ですわよ。お姉様。」

黒子は御坂にウインクした

「黒子…」

そして、御坂は少しホッとした顔で笑いとも何か別の感情が混ざったような表情をしていた。

「ありがとう。お礼にいつものクレープ屋さんでクレープを買ってあげるわ。」

「でしたら、佐天さんと初春も一緒に連れて行きましょう。」

黒子は初春に振った。

「ええ？！いいんですか？御坂さん？」

初春は思わず叫んでしまった。

「もちろん。むしろ、大歓迎よ。どうせ、暇でしょう？一人共？」

「ええ、まあ」

初春はそう答えた。

—クレープ屋前

本日、

誠に勝手ながら休ませていただきます。

「……嘘、何で？」

御坂はぼそりと言った。

「急に休業なんで、ついてないな……」

と答えたのは

サラサラとした黒髪のストレート、芯の強そうな瞳、中学生並みの体型。

佐天涙子

彼女は能力者ではない。ただの友達である。

御坂や白井とは苦楽を共にした仲間であった。

「せっかく、御坂さんが奢つてくれたのに何か申し訳ないです。」

と答えたのは、

花の髪飾りを付け、間の抜けた雰囲気を出し、中学生並みの体型。

初春飾利

彼女は佐天と同じ中学に通いながら、白井と同じ支部の者である。彼女はコンピューターのHキスパートである。

「公園にも誰もいませんね。」

初春は周りをキョロキョロ見ながら言った。

「 そう言えば、人も何か居ませんね。」

佐天が言った。

「 昼間でこんなに人が居ないなんて変ですね。」

「 確かに… そうでーもないですわよ、ほら」

黒子はそこに指を指した。

そこにいたのは一

「 もお～～～全くもつて許しがたいわ、当麻ー何で、急に休業なん
て！！」

インテックスが憤り、

「 じょうがねえだろ、お店の人にも事情があんだからさ、」

当麻は呆れた顔になりながら、インテックスをなだめていた。

「 ちよつとー」

「 げつ？ー」の声は…

当麻は首をギシギシ言わせながら、振り向いた。

「 ハ、ビニール中学生…」

ブチッ

「誰が、ビリビリですって！」

「待て！分かった。今の取り消します。だから、それ、止めてくれ！」

当麻は慌てて、謝る。

「あんたね…」

御坂は大分、怒りのアドバンテージが上がっている様子だったが、突然、

「見ーつけた。アキヤキヤキヤキヤー！」

全員が周りを見渡す。

「…ド」「みてんだよ？」

「つ？！」

後ろを振り返ると、

帽子を被り、ダボつとしたズボンを履いている男がベンチに座っていた。

「お前ら、能力者かい？」

五人と死神（後書き）

やつと一話終わつた～～。次回も頑張りたいです。また今後どうぞ、よろしくお願ひいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0062z/>

とある魔術と科学の交わり

2011年11月30日15時52分発行